

1. 本研究の問題意識

「今日は暑い」、「これはおいしい」というように、形容詞を用いて自身の心情や人や事物の状態を表わすことは日常的な言語活動である。また、その形容詞を述語としてだけでなく、「静かに食べる」、「美しく咲く」のように副次的成分として用いることも日常的に行われる。このように形容詞が形態を変えて副次的成分としてふるまうことは日本語に限ったことではないだろう。それにもかかわらず、外国語の学習において、目標言語のそれを正しく使えるようになることは容易であるとは言えない。そのことは次のような日本語学習者による作文の例が示している。

- (1) ?ひさしぶりにそこに行きましたから、ストレスをみんな解消できるほど おもしろく 遊びました。(韓国語を母語とする学習者による)

(1)の背景には2つの可能性が考えられる。母語からの類推の可能性と、既知の知識からの類推の可能性である。本研究では後者の可能性に着目する。例えば、遊びながら「楽しいなあ」と感じたことは「楽しく遊びました」のように形容詞連用形で言い表すことができる。この知識を持っている場合、(1)のように「おもしろい」と感じたことを形容詞連用形で言い表せるのではないかという類推が働くのも無理はないだろう。

このような事例からは、どのような場合に、どのような形容詞が連用形でふるまえるのか(反対にふるまい得ないのか)を明らかにする必要があることがわかる。本研究は、形容詞の連用形の文中におけるふるまいを連用用法¹と呼ぶ。なぜ、日本語では(1)のように述べることができないのか、上で挙げた学習者の思考に対して一つの答えを示し得るよう、現代日本語の形容詞の連用用法を記述するのが本研究の目標である。

¹ この場合の「連用用法」とは動詞を述語とする文の成分としての連用形のふるまいに限ることとし、「空は青く、風は心地よい」のようないわゆる中止用法、「高く険しい山」のような並列用法、「大きくする」「大きくなる」といった「連用形+する／なる」は考察の対象からは除くこととする。

2. 本研究の目次

序章—本書の問題意識と構成

第一部

第1章 日本語の形容詞と用法

1. はじめに
2. 日本語の形容詞の位置づけ
3. 形容詞の用法

第2章 形容詞の分類をめぐって

1. はじめに
2. 「感情形容詞」と「属性形容詞」
3. その他の分類
4. 本研究の立場と分析

第3章 形容詞の格をめぐって

1. はじめに
2. 形容詞の格に着目した分類
3. 形容詞文と主題と述部

第4章 形容詞の連用用法をめぐって

1. はじめに
2. 先行研究における「修飾語」の扱い
3. 連用修飾語の分類
4. 本研究の立場と分析の観点

第二部

第5章 考察の枠組み

1. はじめに
2. 「観察可能性」による分類から
3. 「説明対象」による分類から—「内面的用法」の下位分類

第6章 外面的用法と形容詞のタイプ

1. 問題の整理
2. 外面的用法と形容詞のタイプ

第7章 内面的用法における形容詞のタイプ(1)
形容詞連用形が動きの様子を表さず、述語が認識動詞ではない場合

1. 問題の整理
2. 動作主認識の副詞的成分と形容詞のタイプ
3. 3種の形容詞の連用用法におけるふるまい
4. 動作主認識の副詞的成分の諸問題
5. 第7章のまとめ

第8章 内面的用法における形容詞のタイプ(2)
形容詞連用形が動きの様子を表さず、述語が認識動詞である場合

1. 問題の整理
2. 「思う」を述語とする文における形容詞のタイプ
3. その他の認識動詞における形容詞連用形のふるまい—「考える」「感じる」

第9章 内面的用法における形容詞のタイプ(3) 動きの様子を表す場合

1. 問題の整理
2. 動きの様子を表す場合の形容詞のタイプ

第10章 その他の問題—「うれしい」と「楽しい」を例に

1. 問題の整理
2. なぜ「メジロがうれしく冴えづっている」が不自然なのか
3. なぜ「うれしく遊びませんか」は不自然なのか
4. その他の形容詞と持続性

第11章 連用用法における形容詞のタイプのまとめ

1. 連用用法に関わる要素(1)—形容詞が表す判断の志向性
2. 連用用法に関わる要素(2)—形容詞が表す判断の基準
3. 連用用法に関わる要素のまとめ—形容詞と動詞とのインターアクション

第三部

第12章 残された課題(1)属性叙述文における構文の選択—「Aさんはピアノを上手に弾きます」をめぐって

1. 問題の整理
2. 「上手さ」を表す文とは
3. A型(形容詞文)で述べる「上手さ」とは
4. V型(動詞文)で述べる「上手さ」とは
5. アンケート調査にみる構文の選択と事柄の具体性
6. まとめ

第13章 残された課題(2)言語間における構文の選択の差異—「(髪を)よく切ったね」をめぐって

1. 問題の整理
2. 考察の対象
3. 「よく」と「cal」が共起する動詞の違い
4. 日本語・韓国語の「出来ばえの述べ方」の違い

終章 まとめと今後の課題

3. 本研究の構成

本研究は三部構成である。第一部では、主に、形容詞の分類、及び、形容詞の連用用法に関する先行研究を概観した。従来の形容詞研究の考察の対象は終止用法であり、それを元に分類されてきたが、本研究では連用用法の分析においてはそれが必ずしも有効ではないことを指摘した。また、従来の研究で形容詞連用形が「連用修飾語(成分)」として副詞と同じ枠内で扱われてきたことについて、その限界を述べた。その限界の一つは形容詞連用形と副詞とを同じように扱うことから生じるものである。もう一つは、必須成分である形容詞連用形(例:「その知らせをうれしく思う」の「うれしく」)が考察の対象外とされてきたことから生じる限界である。第一部では、それを問題点として挙げた上で、連用用法を分析する上で必要な枠組みを提案した。

第二部では「どのような場合に、どのような形容詞が、連用形でふるまえるのか」という問いに対する答えを探るべく具体的な考察を行った。まず、「どのような場合に」という点を明確にするために、「動詞句が表す様子が外的に観察できるか」といった観察可能性という観点から「外面的用法」と「内面的用法」に分けた。本研究ではこのうち従来の研究で深く考察されることがなかった「内面的用法」を重点的に扱っている。「内面的用法」については「形容詞が何を説明しているか」といった説明対象という観点から動きの様子を表す場合と表さない場合に分けた。さらに、動きの様子を表さない場合は、述語が認識動詞であるかによって分類している。本研究における連用用法の分類は以下のとおりである。その上で、「どのような形容詞が」という点を明確にするために、6つのテストを用い、形容詞のタイプを定めた(詳細は4節)。

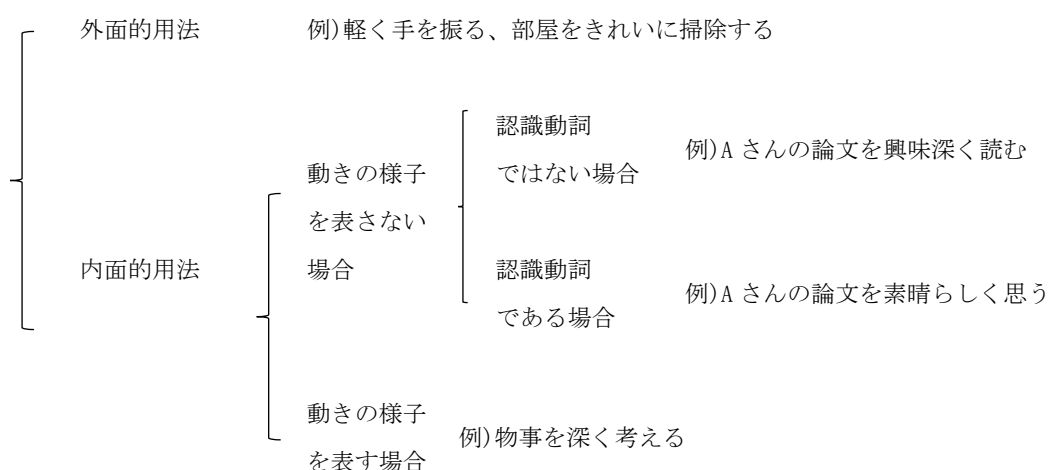


図 1 分析の枠組み

第三部では残された問題として、形容詞のタイプ以外の要因の可能性を探った。形容詞には終止用法、連体用法、連用用法の3用法があり、文脈によっては複数の選択可能性があるところを踏まえ、ケーススタディーとして、属性叙述文における終止用法と連用用法の選択

要件、及びその選択の言語間における異なりについて論じた。

4. 結論—連用用法の成り立ちやすさに関わる要素とは

本研究では、主に内面的用法を考察の対象とし、形容詞のタイプと連用用法の成り立ちやすさとの関わりを考察した。その結果、連用用法の成り立ちやすさには以下の二点に関わることを明らかにした。

- 1) 判断の主体、判断の対象のどちらを志向するか
- 2) 判断の基準・視座のあり方

このうち1)は外面的用法(例:軽く手を振る)の成り立ちやすさ、及び、内面的用法のうち、動きの様子を表さず、認識動詞を述語としない場合であるいわゆる「動作主認識の副詞的成分」(例:Aさんの論文を興味深く読む)としての成り立ちやすさに大きく関わる。

1)について形容詞をタイプ分けするために以下の3つのテストを設けた。形容詞が志向する対象は、「判断の主体」と「判断の対象」の2つがあり、そのどちらにより強く傾くかによって形容詞のタイプは異なる。テスト①~③はそれをはかるテストである。

テスト① 名詞句を主題として、超時的<叙述>文をつくることが可能か

テスト②『わたしは~い。』の形で、対象格を必須とせずに、『わたし』の心の様子を表すことが可能か

テスト③『わたしは~が~てたまらない。』の形で、「わたし」の心の様子を表すことが可能か

テスト①~③と形容詞のタイプとの関係は以下の通りである。

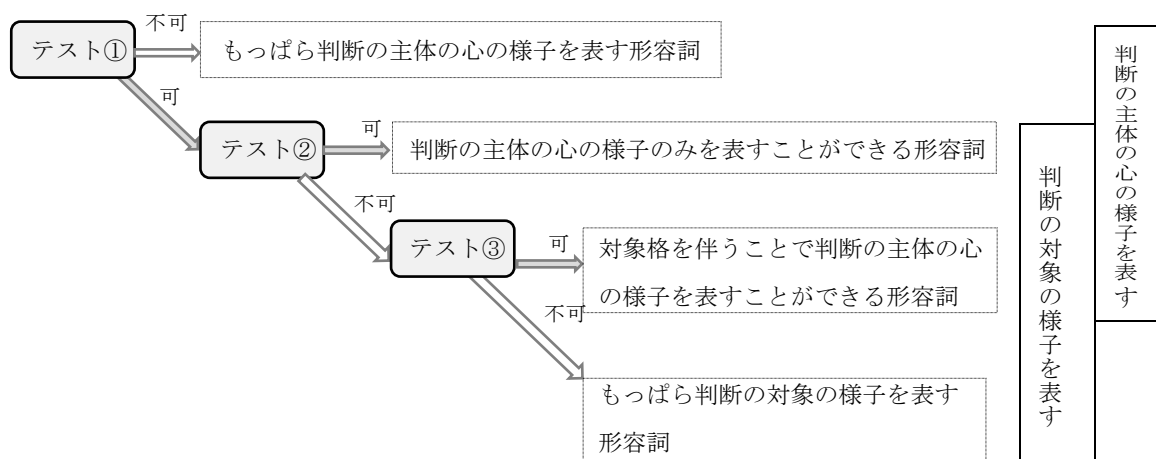


図 2 テスト①~③と4種の形容詞

この4つのタイプは連用用法と以下のように相関する。

表 1 ①～③による形容詞の 4 タイプの連用用法におけるふるまい

形容詞のタイプ		用法		内面的用法 (動きの様子を表さず、 認識動詞を述語としな い場合)	外面的用法
		判断の主体の心の様子 を表す形容詞	判断の対象の様子 を表す形容詞		
もっぱら判断の主体の心の 様子を表す形容詞	羨ましい 愛しい		判断の 主体の 心の 様子 を表す	○	×
判断の主体の心の様子のみ を表すことができる形容詞	寂しい 楽しい	判断の 主体の 心の 様子 を表す		○	○
対象格を伴うことで判断の 主体の心の様子を表すこと ができる形容詞	おもしろい 興味深い おいしい	判断の 対象の 様子 を表す		※ (「取り入れに関わる動 詞」の場合のみ○)	○
もっぱら判断の対象の様子 を表す形容詞	素晴らしい 大きい	判断の 対象の 様子 を表す		×	○

「判断の対象の様子を表す形容詞」(判断の対象をガ格(主格)にとり得る形容詞)は外面的用法が取れ、「判断の主体の様子を表す形容詞」(判断の主体をガ格(主格)にとり得る形容詞)は、連用用法においても動作主の心の様子を表すことができ、内面的用法(動きの様子を表さず、認識動詞を述語としない場合)を取れる。その中間ともいえる、判断の主体を主格に、判断の対象を対象格にとる形容詞(対象格を伴うことで判断の主体の心の様子を表すことができる形容詞)は、内面的用法において述語は「取り入れに関わる動き」である必要がある。これらの形容詞は判断の主体と判断の対象の 2 つの項を求めることから、その動詞は動作主をガ格に、刺激源をヲ格にとる動詞でなければならないのである。このように、連用用法の成り立ちやすさには、形容詞の格構造が関わると言える。

次に、内面的用法のうち、動きの様子を表さず、認識動詞を述語としない場合(例:Aさんの論文を素晴らしく思う)には、2) が関わることを示した。2) については以下の 3 つのテストを行った。テスト④～⑥は「二格」の必須性及び解釈を問うものである。テスト④では基準(適合基準)格としての二格の必須性を、テスト⑤は基準(比較基準)としての解釈の可否を問うものである。テスト⑥は第三者を経験者格としてとれるかを問うものである。

テスト④ 『これは彼には(形容詞)』の「彼には」が必須であるか

テスト⑤ 『これは彼には(形容詞)』が成り立ち、その解釈として『これは彼に適切なものより(形容詞)』が成り立つか(「照合・比較の基準を表す「には」をとり得るか)

テスト⑥ 『これは彼には(形容詞)』が成り立ち、その解釈として『これは彼にとって(形容詞)』が成り立つか(「判断の視座を表す「には」をとり得るか)

テスト④～⑥と形容詞のタイプとの関係は以下の通りである。

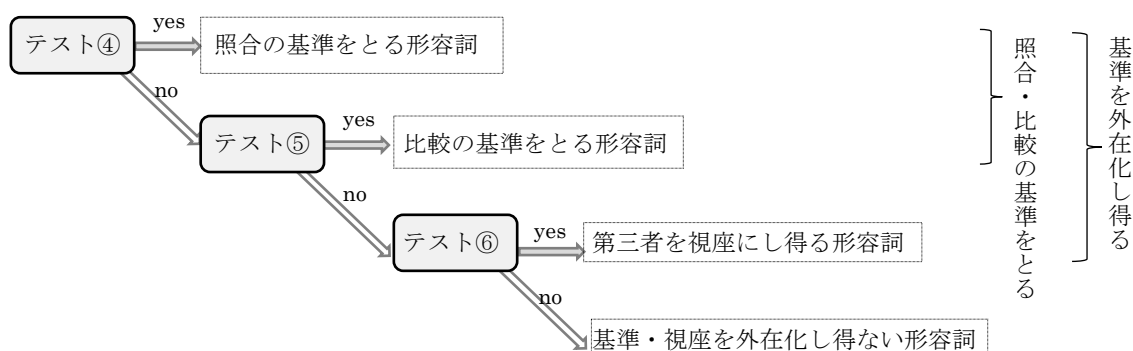


図 3 テスト④～⑥と 4 種の形容詞

この 4 つのタイプと連用用法の相関は以下の通りである。

表 2 ④～⑥による形容詞の 4 タイプの連用用法におけるふるまい

形容詞のタイプ		用法	内面的用法 (動きの様子を表さず、認識動詞を述語とする場合)
照合の基準をとる形容詞	ふさわしい、 等しい		△
比較の基準をとる形容詞	大きい、 広い		△
第三者を視座にし得る形容詞	重要だ、 大切だ		○
基準を外在化し得ない形容詞	素晴らしい、 好ましい		○

この 4 つのタイプのうち、動きの様子を表さず、認識動詞を述語とする場合に連用形としてあらわれにくいのは、照合・比較の基準の「には」をとる形容詞(照合の基準をとる形容詞と比較の基準をとる形容詞)である。照合・比較の基準の「には」をとる形容詞とは、外在する基準と照合・比較するという過程を経た判断を表す形容詞である。形容詞が照合・比較を表す二格を取り得るということはその判断基準を外在化し得ることを意味する。一方、認識動詞は第三者を主語(認識主体)とした言いきりの文で、第三者の認識内容を表すことができないという人称制限を持つ。認識動詞が表すのは判断主体の内面で起こっている、外から観察ができない事態である。そのため、その思考内容においても、判断の過程で外在する事物との照合・比較をするという過程を経ないことが求められる。その結果として、照

合・比較の基準の「には」をとる形容詞を連用形にとりにくくなるのである。このように、認識動詞を述語とする文においては、形容詞が表す判断の基準が外在化し得るかということと、動詞が表す動きが外的に観察できるかということが作用しあうと言える。

形容詞が表す判断を構成するのは、判断の主体、判断の対象、そして判断の基準である。それぞれの形容詞がこれらのどの要素から構成されるかは、格構造によって明らかになるものであり、この 3 つの要素は連用用法の成り立ちやすさを大きく左右する。連用用法の成り立ちやすさは判断の主体、判断の対象のどちらを志向するかという点(テスト①～③)と判断の基準・視座を外在化し得るかという点(テスト④～⑥)が大きく関わる。それに加え、形容詞の連用用法を見るということは動詞文における形容詞(連用形)のふるまいを見るということであるから、その成り立ちやすさには述語動詞の性質も関わる。連用用法の成り立ちやすさは形容詞のタイプと、格構造や人称制限といった述語動詞の性質とが相互に作用することによって定まると言える。

本研究では、連用用法の成り立ちやすさに関わる要素として以上の点を明らかにした。